注文書

書店印

注文　　冊

新刊

文芸社

畠山 権治・著

土佐戦国時代 本山城物語

ISBN978-4-286-09664-3 C0021 ¥1400E

定価 1,470円
(本体1,400円+税5%)

●文芸社12月の新刊●

土佐戦国時代

本山城物語

Hatakeyama Kenji
畠山権治

今までになかった、この物語・一冊で「土佐の戦国時代」が一気にわかる!

この争乱の時代に、細川・本山・長宗我部の各氏は一族の命運をかけ、いかに戦ったか。

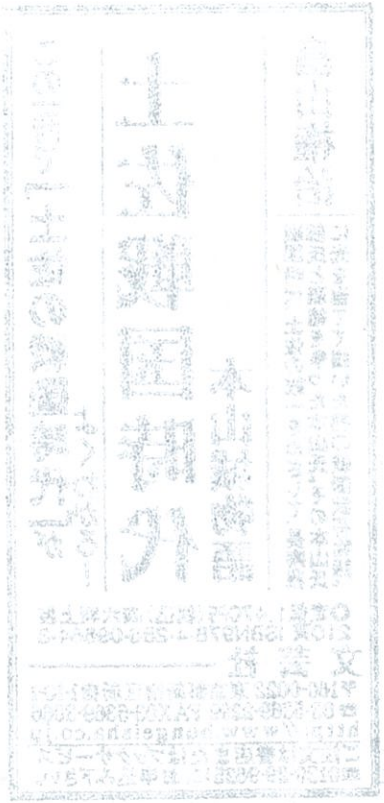
遠大な夢を追って、長宗我部氏と覇権を争った本山氏とは…

本山城・朝倉城・浦戸城と土佐の中原を不動のものとし、「平天下」を求めて進軍した本山氏は…

四六判・上製・210頁　定価1,470円(税込み)

文芸社 東京都新宿区新宿1-10-1
TEL 03-5369-2299 FAX 03-5369-3066

ご注文は本チラシをお近くの書店にお持ちいただくか、またはクロネコヤマトのブックサービス(フリーダイヤル 0120-29-9625、携帯電話からは03-6739-0711)への電話注文、セブンネットショッピング(www.7netshopping.jp)にお申込み下さい。



あとがき

本書は今までに誰も書かなかった、誰にも書けなかった土佐の戦国時代である。それは学究には、どんなに歴史的必然性や整合性があると思っても、立場上から大胆な仮定や推論ができないからだろう。そのことが客観的史料に乏しい郷土史を迷路にし、難解なものにしているのではないかとも思う。

題名の『土佐戦国時代―本山城物語―』を越えて土佐戦国時代の案内書として、その全体像をより簡潔明快に理解していただくために、物語の構成や言葉の表現は平易に心がけ、使命感に燃えて書いたつもりである。

今頃、ふるさと土佐ばかりでなく昔のことを知らない人があまりにも多くなったが、それは若者だけなく、ほとんどの人の関心や興味が薄くなったと言っても過言ではない。あれだけ土佐戦国時代に足跡を残した本山城や土佐第一の規模を誇る朝倉城の存在すら忘れ去られている。さらに、名将・本山梅慶のことなどは論外である。

戦後の社会や教育が、過去の歴史を全て否定するところから出発したことと、本来、血

湧き肉躍るはずの身近な郷土史が、今日まで現象ごとにしか捉えられず、出来事は断片的な記述に終始し難解であるため、本来あるべき歴史の流れが分かりにくくて、物語としての興味を誘われなかったことにも原因があると思う。それにしても土佐戦国時代の認識は、日本史を背景に近代史という身近で日常的な知識として自然に親しんだ明治維新の坂本龍馬をはじめとする勤皇の志士たちの活躍に対する理解とは対照的である。

歴史には四国三郎・吉野川の絶えることなき清流にも似た流れがある。この流れは人間と自然の綾なす空間と時間の経過であり、個々の模様には多少の前後はあっても、大きな流れの中には、なるほどと思われるような順序があり、その現象は人間が生きてゆくための闘争そのものでもある。闘争からは常に勝者と敗者が生まれ、私たちに残された歴史の記録は勝者のものである。だが、そこには勝者にも消し去ることのできない、誰も忘れ去ることのできない敗れた者の主張を感じる足跡や痕跡を見ることができる。

特に本山氏の場合は土佐戦国時代を長宗我部氏が完結し、最後の勝者であったことと、さらに本山氏が和睦の形で長宗我部氏の傘下に組み込まれ、共に「平天下」を求めて協調融合して戦う立場になり、本山氏の過去を主張することなく、むしろ積極的に消していった可能性があることが注目に値する。

本書は物語である。歴史には人間が織りなす色々な模様と流れがある。私の頭の中にある模様と流れを構築しながら自由奔放に浅学非才を顧みず筆を走らせた。まず、歴史の流れや時系列を大切にするため和暦よりも西暦を尊重し、当初はより物語風にと思っていたが、郷土史に慣れない方々もおられるのではないかと、それを捨てて西暦年号を多用した。それは本書の中では五十年や百年が一行の世界だからである。また、広い視野や高い観点から歴史の流れをやさしく理解いただくために郷土史を離れて、ふんだんに日本史にも登場してもらって歴史の流れを確認した。

歴史の模様や流れをどんな形にするかは極端に史実を歪曲しないかぎり、私の決断と裁量を大切にし、仮定や沢山の選択肢のある場合にも、できるかぎり断定的に表現した。それは私が郷土史に書かれた迷路に翻弄された苦い経験の逆を想定して書けばよいと思ったからであり、どのように書いても最終的な判断は読者に委ねられていると思うからである。

土佐戦国時代のところで豪族の経済力を、本山氏・二万五千石とか長宗我部氏・一万五千石とか石高で表したが、石高の記述は今までにした人がなく、私が初公開である。「講釈師、見てきたような嘘を言い」という言葉もあるが、郷土史を論ずるにあたり、郷土史誌に残されたものを解釈したり表現したりはできるが、今日その過ぎ去った事実を確認し

たり体験したり立証ができる人は誰もいない。しかしながら真実は一つである。私は、おのずから、本書の題名に本山城物語と特に物語をつけ足した。この物語と付けた意味を十分に理解していただきたい。

本書は事実の羅列ではなく、私の一定の史観による歴史の流れを特に大切にした。そして、本山城・朝倉城・本山梅慶の物語というよりも土佐戦国時代を理解するために方々の資料を徘徊し無駄な苦労をしなくても、この一冊で土佐戦国時代が一望できる入門書のつもりで書いた。そのため物語の構成は第一・第二・第三部に分け、第一部には終章ではあるが細川氏を書き、第二部を本山氏とし、第三部は紙数は少ないが長宗我部氏とした。これで土佐の戦国時代を飾る細川・本山・長宗我部の三氏全員を登場させた。

私たちの今は否応なしに過去の延長線上にある、未来もしかりである。人間が人間である限り歴史は常に形を変えながら繰り返す。本書は、あくまでも物語で学術書ではないので、温故知新の気持ちで力を抜いて気軽に楽しく読んでいただけたらと願っている。

二〇一〇年七月吉日

畠山権治